



JKビジネスやガールズバーに向かう高校生たち

に とう ゆめ の
仁 藤 夢 乃 女子高生サポートセンターColabo代表理事

私はColabo という団体を立ち上げ、孤立・困窮状態にある少女を支える活動を行っています。①夜間巡回、相談、②基礎的支援（同行支援、食事・風呂・文具・衣類の提供など）、③一時シェルター、④自立支援シェアハウス、⑤自助グループの運営などを通して女子中高生と関わっています。

虐待や貧困、孤立を背景に街やネットをさまようようになり、そうした生活をする中で児童買春やJKビジネスでの性被害にあった少女からの相談が多くあります。知的障害、発達障害の少女が狙われるケースもあり、被害に遭った少女が自傷行為や自殺未遂を行うケースも後を絶ちません。

■「難民高校生」だった高校時代

10年前、私も高校だった頃、父親のDVや母親の鬱病、両親の離婚から家庭が崩壊し、家にいられず月に25日、渋谷の街を徘徊する生活を送っていました。家族と顔を合わせれば暴言や暴力が飛び交い、家族が包丁を持ち出して、殺すか、殺されるかしかないと考えた日もありました。そのため、親が仕事に出ている日に家で仮眠し、夕方から街に出る生活をしていました。ファーストフードや漫画喫茶、居酒屋、カラオケの他、ビルの屋上に段ボールを敷

いて一夜を明かしたこともありました。体を温めるため、安焼酎を回し飲みしました。雑居ビルの屋上で生活するホームレス状態の男子の友人もいました。彼はいつも、自動販売機の下に小銭が落ちていないか探して歩いていました。たまに500円玉を見つけると、牛丼か安いラーメンを食べるので、その日は顔色と機嫌が良くなっていました。

街では、自分と同じような苦しみを抱える中高生と出会いました。当時、「ネットカフェ難民」が社会問題化し、ネットカフェで寝泊まりする30代男性がテレビでよく取り上げられているのを見ながら、「うちらも難民じゃね」「ホームレスだよね」とつぶやいていました。大人だけでなく、中高生にも家に帰れず生活をしている人がいるのと思っていたことから、『難民高校生』（筑摩書房）という本を書きました。自分と似た状況にある子ども達の問題が「不良少年」「非行少女」として、子どもの問題、子どもが悪さをしているという文脈でばかり語られる度に「私たちにも事情があって、街に出ているのに」「本当は家にいたいのに」と思っていました。

繁華街における少年補導が厳しくなる中、23時を過ぎる前に渋谷から住宅街や郊外に移動し、隠れるようにして朝を待っていました。「死

にたい」と願い、飛び降りられそうなビルの屋上を探したこともありました。朝帰りする電車の中では、同年代の高校生が部活の朝練に向かう姿と自分を照らし合わせ、情けなく感じ、下を向き携帯をいじっていました。

家で安心して眠れない日が続くと、学校への遅刻や授業中の居眠り、欠席が増え、教員から注意されるようになりました。なぜ眠いのか、ご飯をちゃんと食べられているのか、想像して声をかけてくれたり、聞いてくれたりした教員はいませんでした。家で起きていることは教員や、他の大人の誰にも打ち明けられませんでした。

授業への不参加が続くと、後から出席しようと思ってもついていけず、補習を受けるような精神的・体力的余裕はありませんでした。テスト前にノートを貸してくれていた友人たちからも、「もっと頑張るなよ」と声をかけられるのが負担で、距離を置くようになりました。

■「大人は分かってくれない」の意味

私が周りの大人に家で起きていることを打ち明けなかったのには、親を悪くいいたくない、親を悪く思われたくない、親や誰かに自分の不安をばらされたくないという想いがあったからです。今、二分の一成人式などで、親への感謝を強要するプログラムを導入する学校が増えています。私も学校教育の中で、自分の権利を侵害したり、虐待したりするような親であっても「家族を大切にできない自分が悪いのだ」と思い込んでいました。親にも病気や障害があったり、経済的な事情があったり、親も孤立していることをわかっている子どもは余計に声をあげられません。

また、裏切りや傷つきにより、大人は信用できない！と思っていたので、相談機関など、見ず知らずの人に相談しようとは考えもしませんでした。児童相談所への相談を勧められたこともあります。が、「私はそこまでじゃない」「そんなところにいったら、どんなことをされるかわからない」と思いました。友達同士でも、ほとんど家庭の事情については話しませんでした。

互いに大変な状況を生きていることをわかっていました。

高校二年生の夏、私は高校を中退しました。私は何も頑張れないという精神状態でした。こんな私を誰も認めてくれないと思っていました。このままではよくない、どうすればよいのだろうと悩んでいましたが、頼ったり、相談したりできる大人はいませんでした。そんな私に声をかけてくるのは、買春者か、危険な仕事に斡旋しようとする人だけでした。それ以外に、自分に関心を寄せてくれる大人はいないと感じていました。

「大人は分かってくれない」「大人は信用できない」という声は、「向き合ってくれる人がいない」「信じてくれる人がいない」という心の叫びだと、私は考えています。

■支援につながる前に、危険に取り込まれる子どもたち

今でも、そうした少年少女に路上やネット上で声をかけるのは、手を差し伸べる大人ではないのが現状です。少女の場合は、買春者や、JK ビジネスや違法の風俗店や児童買春の斡旋業者。少年の場合は振り込め詐欺の受け子や、違法の建築作業や除染作業に斡旋する業者などが声掛けをしています。少女を違法風俗店に斡旋するためのスカウトとして少年が使われることもあります。

渋谷や新宿などの繁華街では、毎晩 100 人ほどのスカウトが街に立ち、少年少女に声をかけています。こうした危険に取り込まれる子どもが後を絶たないのは、困っている子どもたちが支援につながる前に、危険に取り込まれているからです。子どもを利用しようとする大人たちは、彼らの困難や心の叫び、弱みを知っています。どこに困っている子どもがいるのか、どうしたら彼らの信頼を得られるかと常に考えています。子どもたちの文化を学び、生活を否定しない形で、むしろ彼らの生活に入り込むようにして、理解者、協力者であるかのように近づいています。

現在、社会問題となっている女子高生である

ことを売りにした「JK ビジネス」店が集中する東京・秋葉原では、2メートル間隔で少女が立ち、客引きをしています。「お散歩いきませんか?」「ご飯食べませんか?」と男性に声をかけています。私はこれまで、ここで働いた少女140名以上と関わりましたが、その全員が客引き中、買春や性交渉を持ちかけられたといいます。

経営者たちは、組織的に巧みに少女を勧誘しており、ブログや、ツイッター、ラインなどのSNSに求人を掲載しています。店はツイッターアカウントを開設し、女子高生のアカウントをフォローして関心を引いたり、働いている女子高生のSNSで求人情報を拡散させ、少女を使ってスタッフ集めもしています。

「観光案内のアルバイト」という求人を見て面接に行ったら「男性とデートをする仕事だ」と言われ、学生証のコピーをとられてしまったので断れずに当日働くと、カラオケや漫画喫茶で客から性行為を強要された少女。「JK カフェ」でのアルバイトだと思い応募すると、仕事内容を知らされないまま、「JK リフレ」に派遣され、性行為を強要された少女。「スカウト」を名乗る人物に声をかけられ、「仕事を紹介する」と言われたり、「大手芸能事務所が運営するカフェ」や「撮影スタジオ」であるとだまされたりし、ポルノ動画を撮影された被害もあります。被害にあった子どもの多くは、親や学校、友人への発覚を恐れ、誰にも相談できずにいます。

■「普通の子」まで取り込む手口

JK ビジネスで働く少女たちは、3つの層に分けられると考えています。①貧困層、②不安定層、③生活安定層です。①経済的困窮家庭の少女や、②家庭や学校に何らかの困難を抱えている少女のみならず、③両親との仲も学校での成績もよく、将来の夢もあって受験を控えているような「普通の」女子高生が、リフレやお散歩の現場に入り込んでいます。

JK ビジネスが一般化していくと、貧困状態にあったり、コミュニケーションが苦手だった

り、自信がない、障害をもっている等、困窮度が高い少女は生活に必要な稼ぎを得られなくなります。その結果、売春宿に囲われたり、より痛い、臭い、汚いところで性奴隷のように働かされたりした少女とも出会っています。経済的に困窮し、「生理用品が買えない、今日食べる物がない」と話す少女、「給食費や修学旅行費を支払うため」に売春に足を踏み入れたと話中高生もいます。父親からの性的虐待を背景に、「家にいてお父さんにヤラレルよりまし」と、宿泊場所を求め、売春行為を繰り返していた少女を警察が補導した際には、親に連絡し、家に返されるだけで背景への介入は行われませんでした。私は、少年少女が警察に発見され、補導されたとき、それをきっかけに背景への介入や、必要なケアに繋がるような「ケア付きの補導」が必要だと考えています。

■児童福祉から取りこぼされる子どもたち

私たちは、児童相談所や警察、医療機関などへの同行支援も行っていますが、困難を抱えた中高生が公的支援を受けることに高いハードルを感じています。夜間巡回中、街で声をかけた少女に「保護じゃないよね?」と、怯えた様子で言われたことが何度かあります。それまでの不適切な対応から、子どもたちの間で「保護」が恐れるべきものとなっていることは少なくありません。

児童相談所の体制が、困難を抱える青少年の実態と合っていないことも、日々感じています。例えば、開所時間は多くが平日の8:30～17:30です。その時間は学校があるため、相談するには放課後に急いで駆け込むか、学校を休まなければなりません。日中は、親も仕事で家にはいないため、安全に過ごせている人や、日中は人目を気にして外に出たくないという人などが夜間や土日祝日、親が家にいる時間帯に困った時、駆け込める場はありません。金曜日の16時頃、ある少女が「親に殴られて今日帰れる場所がない」と相談をしたところ、「もうすぐ閉館だし土日は休みなので、月曜日にまた電話をしてください」と言われたこともあります。虐

待を理由に家出し、売春をして生き延びていた15歳の少女が相談に行くと「性依存症の自助グループ」を紹介されたこともありました。少女は性依存症だから売春しているのではなく、虐待から逃れるため、夜間泊まれる場所を探して生活をしていたのに。また、一時保護所に保護されている間、学校に通えなくなるケースも多くあり、子どもの学習権が守られません。

公的機関に相談する際、子どもたちには「自ら足を運び、大人に状況がわかるように伝える」ことが求められますが、虐待や性被害にあっている子どもたちが、自ら助けを求めて声を上げることは簡単ではありません。これまで勇気を振り絞り、「誰にも言わない」約束で話をしたにも関わらず、親や教員にその内容を知らされてしまう等の経験をしており、嘘をつくことで身を守るようになっていることもあります。

そうした子どもたちに必要なのは保護やケアですが、指導や矯正の対象として捉えられてしまうことがあるため、気づいた大人が公的機関に同行し、子どもの安心・安全のために伴走することが必要です。学校から児童相談所に虐待通告をしてもなかなか動いてもらえない、生徒が保護を嫌がっているなど、困ったことがあれば、ぜひ教員のみなさんからColaboにご連絡いただきたいです。どのような道があるか、本人の希望を聞きながら一緒に考えたり、たまにColaboにお泊りに来て休んでもらうというようなサポートができるといいなと思います。

一方、スカウト組織や買春者は、少女少女に必要な「衣食住+関係性」を、支援より先に与えています。話を聞き、理解を示し、帰るところがないのなら「寮」を、補導から逃れるための「宿泊場所」を提供し、時に食事を与え、学習支援をしている店もあります。彼らは少女たちを「担い手」として捉え、仕事を与えて取り込むやり方をしています。私たちは、少年非行を単なる非行として捉えるのではなく、背景にある困難や、支援の不足、危険に取り込む大人の巧みさを考えなければなりません。私は、子ども達を危険に取り込む側の手口から、学べることがあると考えています。

■大人は環境問題！

子どもにとって、大人は環境問題です。違和感を持ち、気付いている大人が、手を差し伸べ、声をあげることを諦めてしまつては、現状は変わりません。自信を失くした子どもたちの多くは、先に「大人に諦められた」と感じる経験を持っています。大人の諦めは、子どもに伝わります。子どもたちは、敏感に感じ取ります。荒れていた高校時代、朝帰りする私に声をかけてくれたおばあさんがいました。「おはよう。寒いわね。風邪をひかないようにね」と。そんな当たり前の声掛けを私にしてくれる人が、こんな私に気付いてくれる人がまだいたんだと、おばあさんとすれ違ってから、涙があふれたのを今でも覚えています。困難を抱える中高生と関わる中で、私も傷ついたり、めげそうな気持ちになることもありますが、諦めずに、可能性を信じて声をかけ、関わり続けたいと思っています。

私たちは、すべての少女が「衣食住」と「関係性」を持ち、困難を抱える少女が暴力を受けたり、搾取に行き着いたりしなくてよい社会を目指し、活動しています。困っている人の一番の困りごとは、「助けて」と言えないこと。「あなたは どうしたい？」と問われても、それがわからないことです。混乱した生活の中、落ち着いて考えられる環境や一緒に状況を整理してくれる人との信頼関係や体験があつて初めて自分の状況を見つめ、向き合うことができます。大切なのは、特別な支援ではなく、当たり前の日常です。ほとんどの場合、抱える問題はすぐに解決できることはありません。だからこそ長い目で付き合い、喜びや苦しみを分かち合い、泣き、笑い、怒り、共に歩める伴走者でありたいと考えています。

たった一人の教員の言葉に、傷ついた子どももいれば、一人の教員との出会いや一言に励まされ、生きてきたという子もいます。私の出会えない子ども達に出会っている読者のみなさんが、目の前の子ども達をあきらめず、関わってくださることを願っています。